

「黄金為地」①

本願寺派布教使・行信教校校長 天岸淨圓先生

にょらいだいひ おんどく
如来大悲の恩徳は
み こ
身を粉にしても報ずべし
ししゅ ちしき
師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし —「恩徳讃」(『正像末和讃』)



新型コロナウイルス感染症の影響で、不安な日々が続いております。こういう時でありますからこそ、私たちにとっては本当の意味での^よ拠りどころというものを意識させていただき、よくよく考えなければならない、そういう時でもあるというふうにも思っております。

お話の内容は以前にもお話しをした記憶があることなのですが、「お浄土^{じょうど}」のお話を少しみなさんにお聴聞^{ちようもん}をいただきたいと思うのであります。

1つは、私たちのお宗旨^{しゅうし}である浄土真宗では、私たちは「浄土へ生まれさせていただきます」って言うております。ですから、この「お浄土へ往生する」「お浄土へ生まれる」ということは、どういうことかということ^しを少し触れてお話しをさせてもらいたいと思うのです。

まず1番最初に、私はこの「浄土」っていうことをお話しさせていただいて、みなさんにお聞きいただく時には、1つの聞かせてもらうきちとした決まりというのがございます。よく「お浄土ってありますか？」ってという質問をされるわけです。「住職さん、阿弥陀^{あみだ}さんの浄土ってあるんですか？」という質問をされたり、聞かれたりするのですけれども、実はその浄土^{じょうど}ということは、「あるんですか？」って尋ねられて、本当は答えることのできないお話なのです。言葉の上で「ありますよ」とか「ありませんよ」とかという言葉が使えますけども、「あります」「ありません」ではお話を続けることのできない事柄^{じやうばい}なのです。

よく私申すのですが、「ありますよ」って言ったら、最後は「見せてみ」っていうことに行きつくと思うのです。「ありますよ」「どこに？」「どこそこに」「ほんなら見せて。見に行く」ってお出でになりますか？十万億土の彼方まで。

逆にまた「そんなありません」って言ったら、お経^{きやう}って信用できないですよ。ないようにあるってそんなおかしいことを言っているのは、これはやっぱりいつの時代でも信じませんよねってなりますし。

正直に勉強不足で「わかりません」って言うたら、無責任^{むせきにん}やって言われますし。

あるかないかもわかりもせずに、わかったような顔して「ある」とか「ない」とかってなこと言っ^つて説教している。「そんなものすごく無責任やないの？」って当然言われることでもありますので、どこへ入っても、実は話にならないことです。

どこに問題があるかって言いましたら、やっぱりその尋ね方に問題があったのです。同じことを繰り返すようですが、仏さん^{ぶつさん}っていうことを尋ねる時も一緒なのです。「仏さん^{ぶつさん}っていますか？」

ていうふうに尋ねるお方の気持ちは、「私たちがお参りをしますお仏像のような生き物、全身が金色に光っている変わった姿の生き物がどこかにいますか？」ということとほぼ同じような気持ちです。それを確かめようというような気持ちで聞かれることが1番私は大きいのだらうと思います。

いるか、いないかもわからないようなものを、「いる」と思って信心するってというようなことは出来やしません。そやから、いるっていうことをわからせてもらったら、「信じます」とおっしゃるので、だったら、もしその人の前にこういう変わった姿の生き物を連れてきて、「ここにいてるやん」と言ってお見せしたら、みなさん方はその変わった生き物に手を合わせて、その生き物がしゃべることを自分の拠りどころとして、尊い大切なこととして聞きなさるかどうかって言ったら……危ないでんな。私はそう思います。

「ほー、おるやん」「変わった生き物いてるやん」「仏さんってほんまにおんねんやんか」……これだけですな。「ようわかったわ」……それは、いるか、いないかがわかっただけであって、何でそのお方に手を合わさないといけないかっていうことについては、何の理由にも説明にもなっていないっていうのですから、これも聞き方が、要するに器の身と蓋ふたが合っていない状態なのです。

そこで昔のお坊さんというか、そういうことをお説教された人は、1番最初にそれを習っているのです。「いてはりますか？」って聞かれたら、「あんたの聞き方間違っまっせ」って言うようにちゃんと訓練されているのです。「お浄土ってありますか？」って言ったら、「その聞き方ではわからんで」と答えるように、その答えもちゃんと教えてもらっているわけです。

ところが時代が現代になってからは、そういうことを教えてくれるお坊さんも少なくなっただし、聞く若い人も少なくなっただし、何よりもお寺の人があんまり勉強せんようになった……正直言っとく。

それで改めてこう聞くのです。「仏さまは成なれるか、成れんか」って聞きますのや。「仏さまに成れるか、成れんか」ですから、「成じょうぶつ仏できるか、成仏できんか」って言う。「成仏」っていう漢文は、「仏に成れるか、成れないか」というふうに答えているわけですね。

それからこっちはちょっとわかりにくいかと思いますが、浄土は「心が育つか、育たんか」って言うのです。もしくは「心が開かれるか、開かれないか」っていうふうに言うのです。

ですから、お浄土っていうことをお話しする時には、これは心の問題ですよということです。「心」っていうのはどういう言葉に直すかって言いますと、現代の言葉では「感性」と翻訳します。もう少し言うと「感受性」です。そういうものに翻訳のできる仏教用語です。

常々申しており、重なって恐縮ですが、お聞きいただきたいのは、仏教、仏さまの教えっていうのは、「心」という字を書いて、「こころ」ですね。心臓という意味ではありません。これはいわゆる感受性の問題なのです。

ですから、そのお人お人がそれぞれの現実のあり方をどういうふうに受け止めていらっしゃるかということが、実は仏教という教えの大切なポイントなのです。

2020年7月1日「正宣寺真宗特別法座」より

YouTube「浄土真宗本願寺派 光寿山 正宣寺」チャンネルにて配信中